

S O B A 活動報告書

第 1 4 号



2 0 1 7 年 3 月

SOBA とは

SOBA (Symposium of Bullying in Aichi) は、子どもの「そばにいる」ことを活動の姿勢とする、愛知教育大学の学生を主体としたボランティアグループです。愛知県内で相次いだ「いじめ」に関する事件をきっかけに始まった「いじめを考える会」を前身とし、現在は教育臨床総合センターの研究教育活動に、学生主体の活動として位置づけられています。

子どもの「そばにいる」という姿勢を具体化するため、子どもに近い「お姉さん」「お兄さん」の立場から、時には自分たち自身の「子ども」としての体験を振り返りつつ、リアルタイムで子どもが抱える問題について学んでいます。また子どもと関わりを続けるため大学外部との交流を進めています。活動にあたっては、弱い立場に置かれたがちな人々の力を引き出す「エンパワメント」、仲間同士の支え合いを意味する「ピア・サポート」などのキーワードによる学習やコミュニケーションのトレーニングにも取り組んでいます。

主な活動に、毎週の「例会」での学習会の実施、地域で子どもに関わる教育機関や NPO 関係者を招いた拡大学習会、地域の教育機関や NPO で子どもと触れ合う活動（プログラムの考案や実施）があります。また、愛知教育大学大学院の学校教育臨床専攻の方々とも連携し、新たな取り組みを進めています。

もくじ

はじめに	01
第Ⅰ部 活動報告	
1. 例会	05
2. 不登校・学びネットワーク東海との交流	13
3. キッズクラブへの参加	14
4. 教育臨床カフェ	16
第Ⅱ部 メンバー活動報告	
4年生	21
3年生	21
2年生	23
1年生	23
第Ⅲ部 資料	
東山動物園ボランティア	29
キッズクラブ製作物	29
学習発表会 プレゼンテーション資料	31
教室の中の多様性——安心して過ごせる環境をつくるために	36
おわりに	43

はじめに

代表 北山桃菜

今年度も多くの方の温かいご支援のもと、SOBA の活動報告書の作成を行うことができました。

今年度も新入生を迎える、たくさんの人数での画期的な活動ができたように思います。例会では主にいじめや発達障害についての事例を取り上げ、充実した話し合いを行うことができました。5月と1月には例年同様、小学生と交流する機会を設けました。動物園のボランティアでは、不登校の子どもたちと一緒に園内を周りました。キッズクラブでは2か月ほど前から準備をし、当日も小学生と一緒に楽しんで活動ができました。とても貴重な体験ができたと感じました。今後はさらに子どもたちと関わる機会が増やせられればなと思います。恒例の臨床カフェでは大学院生の皆さんとともに、開催しました。さらに今年は学習支援事業の方を招き、貧困とそのサポートについてお話を伺うという新しい機会も設けることができました。

今年度もたくさんの人と関わり、勉強をしました。大学院生のみなさん、不登校・学びネットワーク東海の方、チャンスの講師の方など、たくさんの関わりが得られたように感じます。今年は一年生が4人増え、また例会への参加人数も増えたため、さまざまな見方で意見を交流することができました。教員の立場、カウンセラーからの立場など考え方を広げられています。来年度もさらに深い学びあいができるよう、努めて行きたいと思います。

2016年度のSOBAの活動をこの報告書にまとめました。この報告書によって見えてきた課題や現状を振り返り、次に生かしたいと思います。SOBAの活動内容を知っていただき、ご理解とご協力をいただければ幸いです。

第 I 部

活動報告

1. 例会

1.1. 新入生との交流

①アンゲーム

「UNGAME（アンゲーム）」とは 1971 年にアメリカで誕生した自己表現ゲームの一つです。見た目は双六のようなボードゲームですが、アンゲームには勝ち負けやゴールはありません。否定的なコメントはしないということが唯一共通で決まっているルールですが、それ以外のルール、例えばゲームの時間も参加者全員で決めることができ、自由度が高いことが特徴です。私たち S O B A は、新入生と上級生がお互いをより知るきっかけとして、また、コミュニケーションで大切な技術の一つである相手の話を傾聴するという体験のために毎年アンゲームを行っています。

アンゲームのボードには、「もし、あなたがどこかに逃げ出したい気分であれば（ボードに描かれている）ヨットに乗ってください」といったその時の気分を尋ねるマスや、ボードの中央に積まれた質問カードを引いてそれに答えるマス、他者が質問に答えた内容などに対してコメントを返したり、それまでのゲーム中での発言で気になったことに質問できるマスがあります。コメントのマスに止まるまでは他者の発言に対して感想を述べたりせず、ひたすら聴き役に徹します。この時、発言者の語りをメモに書きとどめ、その語りに対する自分の感想や意見、質問などを考えておくことでコメントのマスに止まった際により深く相手のことが知れ、自分を知ってもらえるような話の深まりにつながります。

初めてアンゲームを行う新入生は、ゲームを始めるまではこれから何がおこるのかという不安で少し緊張している様子でしたが、バラエティに富んだカードの質問や先輩のユーモアあふれる語り、またどんなことを話しても否定せずに聴いてくれる雰囲気に次第に笑顔がこぼれていきました。ゲーム中に自分のことを語り、他者の語りを聞く体験を繰り返すこととで相互理解が深まるということもアンゲームの魅力ですが、ゲーム中にメモしたことを見返して「あの時こんな話をしたな」「あの子のこういう一面は意外だったな」と後から思い出を楽しめることもアンゲームの良い点だと思います。S O B A のメンバーが互いをより知ることができる初めのイベントがアンゲームなので、これからも大切な伝統行事として受け継いでいきたいです。

②チームビルディング

「チームビルディング」とは、同じ一つの目標を目指し、複数のメンバーが個々の能力を最大限に發揮しつつ一丸となって進んでいくような組織・集団づくりや、チームをまとめる手法を指します。S O B A では、2016 年度のメンバーの親睦を深めるために、新入生歓迎会の際にチームビルディングを実施しました。

チームビルディングとして実施ゲームは、「動物bingoゲーム」です。3 × 3 の 9 マスの中に、参加者がそれぞれ自分の好きな動物の名前を他のメンバーに知られないように書き

ます。そして参加者が一人ずつ動物の名前を挙げていき、全員がbingo出来るように目指します。一人が勝ち抜くことが目的ではなく、全員がbingo出来ることが目的の一つです。今回は動物の名前を挙げていく順番を誕生日の順番にするというルールを設定したため、参加メンバーの好きな動物と誕生日を知ることができ、それらの話題で盛り上がることもできました。楽しく手軽に実施でき、チームが一つになっていくきっかけにもなる効果的なゲームでした。他にもたくさんの種類があるので、今後はそれらも体験したいです。

1.2. 一般社団法人チャンスのみなさんとの交流

例会の時間を利用して、名古屋市中学生の学習支援事業を行っている一般社団法人チャンスさんに交流する機会を設けていただきました。最初に一通りお話をうかがい、その後に SOBA のメンバーから質問をすることで、理解を深めることができました。ここでは貧困で塾に通えない中学生への支援を行っています。貧困によって、塾に通えなかつたり家で勉強に集中できなかつたりすることで、高校や大学に通えなくなります。それを阻止するために活動していると知りました。実際に子どもたちに勉強を教えている大学生の方にもお話をうかがうことで、現状を知ることもできたように思います。SOBA の中にも教育現場で働くことを目指すメンバーがおり、貧困の子どもともかかわる可能性があります。そのため、このような取り組みを身近に感じ、興味をもつことができるいい機会だったように感じました。

1.3. 事例検討

今年度は一年生が興味のあることを積極的にとりあげました。まず最初はいじめについて検討しました。大津のいじめ自殺事件について新聞の記事をよみ、その内容を踏まえて、「周りの友達はどうしたらよかったです」「担任の先生はどのように対応すべきだったか」「もし自分が同じクラスだったらなにができるのか」などについて意見を交換しあいました。人数が多かったので複数のグループにわかれ、グループ内でこれらについて話し合ったのち、全体でそれぞれのグループでどのような意見が出たのかを発表しあいました。その中で話題になったのが、担任の先生はいじめられている子が追い詰められていると気づかなかつたのかという話から、今は担任の先生がやらなければならない業務が多すぎる、担任の先生が生徒一人一人と関わる時間を作れないようになってしまっている学校の職場環境に問題があるのではないかという話題にまで及びました。

また、発達障害についても検討会をしました。アスペルガー症候群、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥・多動性障害）の本があるなかで、アスペルガー症候群についてをやりました。本が、事例をわかりやすいイラスト、漫画にしているものだったので場面が想像しやすく多く議論できました。一年生は障害自体についてまだ理解がおいついていない部分もあったので、本を参考に事例検討をすることで、一つの障がいの名前でくくられていても、症状は全く違うのだということなどが分かりました。

一年生にとってはわからない単語、症状が多いですし、いじめの現場も想像がつかない場合もありました。なので、事例検討会を通して、いろいろな事例に触れることが出来て、視野が広がりました。

1.4. 学習発表会

学習発表会では、一年生4名がそれぞれ自分の関心のある事柄について、夏季休業中に調べてきたことをプレゼンテーションしました。それぞれが選んだテーマは「ダウン症」「不登校」「愛着障害」です。

まず、一人目は「ダウン症」について発表してもらいました。聞きなれない言葉の詳しい説明や具体例を織り交ぜながら、わかりやすく説明してくれました。そして、ダウン症に対するイメージも変わりました。ダウン症については自分から知ろうとしなければ理解することはできません。今回発表を聞くことで詳しく知ることができました。ダウン症の方と関わることは誰しもあることです。発表から理解できたことを覚え、これをきっかけにさらに自分でもより理解するために調べていかなければならぬと思いました。

次に、「不登校」について発表してもらいました。不登校のテーマを選んだ人は二人いたので、それぞれ発表してもらいました。不登校は現代では常に問題になっていることです。不登校の現状や不登校になってしまう原因、どのように不登校の子供たちをケアしていくべき良いのかを知ることができました。子どもたちの悩みに対して、学校に行くことをただ促すだけでなく、子どもたちの気持ちをよく考えて見守ることがとても重要だということに気づくことができました。子どもたちは人間関係や勉強など、その時期特有の悩みを抱えています。更に、不登校の子どもたちのケアは心だけでなく、勉強面でも遅れが出ないように支援していかなければいけません。支えるための施設も設けられていますが、更に子どもたちがしっかりと未来を歩んでいけるように、親をはじめとした大人がまず正確に理解し、支えていかなければならぬと思いました。

そして最後は、「愛着障害」についてです。一年生にとって愛着障害はあまり聞いたことがない言葉でした。その障害はどのようなものなのか、そしてそれを引き起こす原因や種類等、詳しく説明してもらいました。発表を通して、幼少期の親との絆の大切さがどのように人との関わり方に影響しているのかについて知ることができました。現在、児童虐待の報道は絶えません。精神面身体面だけでなく、子どもたちの未来に大きく影響するものとして真剣に受け取っていかなければならぬと思いました。

1.5. いじめ・不登校についての発表

3年生が学んでいることを SOBA で共有しようということで、それぞれが文献などを元に作成した「不登校について」、「発達障害について」というレジュメを配布し、どのような定義なのか、どのような事例があるのか説明しました。

まず第一週目は「不登校について」の講義をしました。不登校についての定義は数多くあるが、文部科学省の定義を説明しました。また現在、不登校児童生徒は何人いるか、全児童生徒に占める割合はどのくらいなのか、平成5年度と平成18年度の不登校児童生徒進学状況の変化をグラフで視覚化して示しました。また不登校にはどのような種類があるのか、表で示しました。例えば教師との人間関係・環境に馴染めないなどの「学校生活上の影響」、遊ぶため・非行グループが原因の「あそび・非行」、虐待・貧困・片親家庭などの「家庭の事情」など、六つの要因を挙げました。この不登校の六つの要因と、その具体的な内容については、自分たちで文献の不登校事例を読み、整理して命名したものです。

そして不登校状況にある児童生徒によくある特徴を事例を読んで挙げ、「外から見えやすいもの」と「外から見えにくいもの」の二つに分けた表を示しました。「外から見えやすいもの」には生活リズムの乱れ、無気力状態になる、体調不良や食欲不振が見られる、などの本人以外も見て分かるものを入れました。「外から見えにくいもの」には登校に対する葛藤、やる気が起きない、人間不信になる、などの本人にしか分かりにくいものを入れました。

最後に不登校児童生徒に対する対応を考えました。「不登校児が安心して暮らせるために…」、「精神の不安定さを解消するために…」というように、不登校児童生徒を中心に考え、学校側の対応に偏らないようにしました。具体的には、「不登校児が安心して暮らせるために…」という項目には、①家庭や担任教師、また周囲の人に理解してもらう、②家族とのコミュニケーションを図り、家に居場所を作る、③家族に問題がある場合、家族といったん引き離し安心できる場所を確保する(施設入所など)、④いじめや友人関係が不登校の原因の場合、転校を視野に入れる、などの項目を入れました。SOBA で学んだことを生かし、不登校の子どもが学校に復帰することが子どもの幸せとは限らないというスタンスで考えることに力を入れました。

第二週目は、「発達障害について」という講義をしました。まずは「発達障害者支援法」第二条に基づいた定義を示し、自閉症スペクトラム障害、学習障害(LD)、注意欠陥・多動性障害(ADHD)がどのような位置づけをされているのかを図で示しました。

その後、自閉症スペクトラム障害について、DSM-5 ではどのような診断がされているのか、そして「ウィングの3つ組」という考え方について紹介しました。「ウィングの3つ組」とは、自閉症スペクトラムの子どもたちが持つ特性の3つの特徴的なもので、①社会性の問題(人との関わりが苦手)、②コミュニケーションの問題(コミュニケーションがうまくとれない)、③想像力の問題(応用力が乏しい、こだわりがあり、切り替えが苦手)というものです。それらに対して親でも目を合わせないことがある、言葉の裏の意味や皮肉を理解できな

い、大声や否定的な言動に強く拒否反応を示す場合があるなどの具体例を挙げました。自閉症スペクトラムの子どもに対するサポートとしては、原因が分かっていない障害であることから、治すのではなく、自閉的な特性を持ちながらも生活しやすくしていくという方針で考え、TEACCH プログラムなどの養育を行うことを提案しました。また自閉症スペクトラムの子どもとのかかわり方は、ひとつずつ伝えること、具体的な言葉で伝えることなどが良いとしました。

二番目に、注意欠陥多動性障害について、DSM-5 ではどのような診断がされているのかということと、学齢期の子どもの 3~7% が ADHD だといわれていることを紹介しました。ADHD の子どもたちに対するサポートとしては、「ADHD の子どもへの対応」と「ADHD の子どもと接するときには」という項目に分け、それぞれ頻繁に肯定的なフィードバックを行う、子どもと接する時には自分自身も首尾一貫した新年や態度を持つなどの具体案を説明しました。

三番目に、学習障害(限局性学習障害)について、DSM-5 ではどのような診断がされているのか、LD の子どもが持つ特性、LD 児に出現しやすい他の問題などを紹介しました。LD の子どもは 8 割以上が原因不明ですが、発達・身体面において合併症を持っていることを説明し、その一方で LD を背景として様々なストレス状況を経験していくなかで二次的に生じてくる行動・精神面の合併症があり、二次障害が引き起っていることを問題視しました。LD の子どもに対するサポートとしては、注意力障害、多動性、衝動性などの周囲が困る行動への対応、得意な面を伸ばすといったような学習面の対応、自身の存在に自信がもてるような言葉かけなどの精神面への対応の 3 つに分けて説明しました。そのような支援を行う中で大切なのは、「読み障害がある子どもが少しでも読めるように支援することは大切だが、読めるようになることだけが目的といけない」という自分たちの考え方を説明して終わりました。

2 週にわたって 3 年生が 1, 2 年生に講義を行うという形式で活動をし、発表後には 1, 2 年生からの質問をうけてお互いに学びを深めました。全員にとって非常に意義のある発表になったと思います。

1.6. 実習の発表

愛知教育大学現代学芸課程臨床福祉心理コース3年生の2人に児童養護施設那爛陀学苑での実習の体験についてお話しを聞きました。

○内容

- ・那爛陀学苑の居住スペースはユニット型で、女子と幼児のユニット、男子の小規模ユニット、男女の小規模ユニットに分かれている。
- ・一日の流れ
 - (午前) ・出勤
 - ・子どもと一緒に朝食を食べ、小学校への登校を見送る。
 - ・子どもたちが学校に行っている間に、フロアの掃除をする。
 - ・幼児さんと遊ぶ。
 - ・昼食を幼児さんと一緒に食べる。
 - (午後) ・下校指導、小学生の宿題を見たり、次の日の準備を一緒にしたりする。
 - ・夕食を子どもたちと食べる。
 - ・子どもと遊んだりして一緒に過ごす。
 - ・洗濯物を片づけるなどの家事をする。
 - ・退勤
 - ・子どもたちと仲良くなるためには、一人一人をよく観察して、様々な視点からアプローチをすることが必要である。
 - ・子どもたちとの触れ合いを通して学んでいくことが多く、うまくいかないことがあっても粘り強くかかわっていくことが重要である。
 - ・子どもたちと一緒に遊んだり、流行の話題についていけることも関係を深めるためには重要であり、子どもたちと同じ目線に立って接することが大切である。

先輩方のお話を聞いて、児童養護施設はどのような所で、どのような生活をしているのかをイメージすることができました。また、先輩方がどのように子どもたちと信頼関係を築いていったかを聞く中で、子どもたちと関わっていくうえで大切なことについても学ぶことができました。

今回貴重なお話をしてください、ありがとうございました。

2. 不登校・学びネットワーク東海との交流

5月22日（日）に、不登校・学びネットワーク東海さん主催のイベント「親子の野外交流会」に、ボランティアとして参加させていただきました。東山動植物園で不登校の子どもたちと交流する、という内容でした。

SOBAに入って初めての学外での活動であり、私自身「不登校」と言われる子どもと顔を合わせるのは初めてなので、始まる前はとても緊張しました。しかし、実際に子どもたちと会い、園内を回りながらコミュニケーションをとっていくうちに、その子たちが不登校児であることを忘れて楽しんでいる自分がいました。不登校だからといって身構える必要はなく、普通の学校に通っている子どもとほとんど変わりませんでした。ただ、SOBAメンバーの一人は、子供たちの中の一人（フリースクールに通っている）に、小学校のことについていろいろ聞かれたそうです。私たちが当たり前だと思っている生活も、彼女たちにとっては珍しいものなんだなと感じました。

子どもたちは、最初は親御さんの後ろに隠れたり、団体の方にくつついていたりして緊張している様子でした。私たちもなかなか子どもたちと話せなくて、距離感をつかむのに少し苦戦しました。しかし、午後からは徐々に距離が近づき、動物のことについて教えてくれたり、自分のことを話してくれるようになりました。親御さんや、不登校・学びネットワーク東海の方々ともお話しすることができて嬉しかったです。子どもが不登校になったことや抱えている気持などは聞きませんでした。今思えば、そのようなことも聞けたらもっとよかったですかなと思います。

本を読んだり事例を見たりするだけではわからないたくさんのこと学べた1日でした。短い時間でしたが、とても良い経験になりました。

3. キッズクラブへの参加

【キッズクラブについて】

キッズクラブとは、小学生から中学生の子どもを対象とした刈谷市の子育て支援事業であり、市内のNPO法人「子育て・子育ちNPO スコップ」によって運営されています。年に一回、SOBAが2か月前から準備をし、当日は子どもたちと一緒に工作をして遊びます。今年は、SOBAのメンバー4人で参加しました。

この日は雪が降っておりとても寒く、小学生の参加者が2人でした。ですがそのことにより、SOBAのメンバーも手厚く教えることができました。小学生の2人の集中力はとても高く、熱心に取り組んでくれている様子がうかがえました。私たちはどう接していいか戸惑うこともありましたが、工作をおして距離を縮められなのではないかと思います。作品が出来上がったときに嬉しそうにしてくれていてよかったです。

【日時・場所】

2016年1月14日（土）10：00～11：30 刈谷市総合文化センター

【活動内容】

今回は、3つの工作を用意した。

□ ピヨンピヨンレース

トイレットペーパーを半分に切り、そのまわりに折り紙を貼り付ける。その胴体に好きな顔を作り貼り付ける。完成したら背中の部分をおしてゴールまでの速さを競う。

□ だるま落とし

トイレットペーパーを短く切り、それぞれに粘土をつめて底とふたをする。側面に好きな紙をはったり顔をかいたりしてアレンジする。

□ 組み合わせパズル

牛乳パックを切って12面に2種類の絵をかく。組み合わせて全6面が同じ絵で合わせるように工夫してくみあわせる。

【参加したメンバーの感想】

□ 1時間半という短い時間で、来てくれた子どもも2人しかいませんでしたが、とても楽しかったです。作るときの2人の集中力に驚きました。また参加したいです。

□ 子どもたちに楽しんでもらえてよかったです。作り方が一人ひとり違っていて、試行錯誤しながら取り組み、完成した時にとてもうれしそうにしていたのが印象的でした。今回

は自分から積極的に子どもたちに話しかけることができなかつたので、次回はたくさん話せるように頑張りたいと思いました。

- 初めてキッズクラブに参加しました。なかなか子どもたちとふれあう機会がなかつたのでとても緊張しましたが、来てくれた子どもたちはすぐに興味を持ってくれて、とてもうれしかつたし、お話をたくさんできて楽しかつたです。頑張って準備をしたかいがありました。子どもたちと関わる機会をもっと積極的に取り入れていきたいと思いました。
- 今回のキッズクラブに参加してくれた小学生が 2 人と少なく、わいわいという雰囲気ではなかつたのでどうしていいか迷いました。でも一緒に工作をしていくうちに話せるようになっていったし、完成して喜んでいる姿をみることができて、参加してよかったです。来年も機会があれば関わっていけたらいいなと思います。

4. 教育臨床カフェ

教育臨床カフェとは、愛知教育大学教職大学院教育臨床専攻の学生と SOBA との共同活動の総称で、2014 年から本格的な活動がはじまり、今年で 3 年目に突入しました。昨年に引き続き今年もそれぞれに講師をお招きし、2 回の企画を行うことができました。

教育臨床カフェ 2016 年度 1 回目（2016 年 6 月 22 日）

「発達障害の世界 のぞいてみませんか？」

参加者：学生 23 名、教職員 3 名、一般 4 名、報道関係 4 名 計 34 名

今年度一回目の教育臨床カフェは、「発達障害の世界 のぞいてみませんか？」というテーマのもと、発達障害の疑似体験ワークショップを行いました。講師は愛知教育大学教育臨床学講座准教授の三谷聖也先生です。

—疑似体験ワークショップの内容—

・聞き手とは違うはさみを使って複雑な图形を切る。

右利きの方は左利き用の、左利きの方は右利き用のはさみを使って愛知県の型を切り取りました。なかなか思うとおりに刃が向かなかったり、切りすぎてしまったりと、うまくいかないことにイライラしたり、情けない気持ちになってしまった方が多かったです。発達障害児の特徴の中には「不器用さ」というものがみられます。この体験を通して、日々の生活の中で、多くの人にとっては些細な事が、彼らにとってはどれだけ大変なものなのかを知ることになりました。

・筒を通して漢字一覧の中から同じ漢字を見つける。

視力に問題はありませんが、見える範囲が極端に狭いといった特徴を体験するワークでした。筒を通して見ることで、普段見えている視界とは比べ物にならないくらい小さい範囲でしかものが見えず、すべてを一通り見まわすだけでもかなり時間がかかりました。配られたプリントにはたくさんの漢字が並んでいて、その中から同じ漢字を見つけていくのですが、すべてを視界に入れながら一部分に注目して探していくのとは違って、一度に目に入ってくる情報がとても少なく、位置を把握して視線をずらす、ということを繰り返してようやくペアが見つけられるといった具合でした。

・与えられた言葉をイラストにする。

これは、言葉からイメージを連想することが苦手な子どもたちへの支援について考えるためのワークでした。例えば、「水」という言葉からイメージして参加者が書いたイラストは、しづく、水道から水が出ている様子、コップに入った水など三者三様でした。また、「入る」という言葉についても、人が部屋に入る、人の輪に入るなど様々な

解釈のイラストがみられました。

自身が連想していることが誰にとっても連想されることであると認識することは間違います。子どもたちにわかりやすく伝えるためには、抽象的で大きな意味合いを持つ言葉を用いるのではなく、的確で具体的な言葉でもってその子がイメージを描けるようにしていくことが大切なのだということを学びました。

今回の疑似体験ワークショップを通して、発達障害の世界を身をもって感じることができました。今後、発達障害を持つ子どもたちとかかわっていく中で、彼らがどのようなことに困難を抱えていて、どのような気持ちで様々な活動に取り組んでいるのかを知ることはとても大切なことだと思います。今回の体験は発達障害の世界に触れる第一歩となったのではないかでしょうか。

教育臨床カフェ 2016年度2回目（2016年11月9日）

「子ども同士のトラブルの解決！－法律の専門家に学ぶ－」

参加者：学生20名、教職者4名、医療関係者1名 計25名

教育臨床カフェ2回目は「子ども同士のトラブルの解決！－法律の専門家に学ぶ－」というテーマのもと、弁護士の原道也氏をお迎えして、講義と法教育ワークを行っていただきました。

講義では、子ども同士のトラブルにはどのようなものがあるのか、そしてそのトラブルはなぜ発生するのか、また弁護士としてどうトラブルに関わっていくのかといったことをわかりやすく教えていただきました。

法務ワークでは、「模擬調停プログラム」というものに取り組みました。アパートの大家さん、そのアパートを借りている人、調停員の3人1組になって、お互いの言い分を言い合い、最終的には調停にまとめるというものです。大家さんにも借り主にもそれぞれ主張したい部分があって、調停員は双方の意見を聞いたうえで、状況をまとめました。

各グループに分かれて前半部分の話し合いを終えた後、各グループのそれぞれの役割ごとに分かれ作戦会議を行い、「ここまでだったら譲歩できる」「この部分はもっと深く聞いていく必要がある」など、各自の立場から見た譲歩案を考えました。話し合いが終わり、どういった折衷案でまとまったのかを各グループごとに発表しあったところ、うまいことまとまったところもあれば、双方が譲歩できない部分があり解決に至っていないという部分もありました。ワークの参加者は、どこまで自分の意見を主張してよいのか、譲歩すべき境界線はどこなのか、といった点にかなり悩まされていたようです。

学校現場において、子ども間のトラブルや、親御さんと学校とのトラブルなど、教員の力だけでは解決が難しい状況に陥る場合が多くあると思われます。一人ひとりの法律への理解と、教育現場と法律の専門家との連携のもとで、子どもたちがより良い学校生活を送って

いけるようさせていくことが重要であるということを学びました。

法務ワーク 模擬調停事案の内容

○大家さん

- ・介護が必要になった実母のために、現在のアパートを取り壊して二世帯のバリアフリー住宅を建てたい。
- ・アパートは築 40 年で、今年に入って市役所の人に震度 6 弱の地震で倒壊の可能性が高いといわれる。（耐震工事の必要性）

○借り主

- ・けがをして仕事を辞め、8 月から家賃を滞納している。（家賃は月 5 万、現在 10 月）
- ・11 月からは働くことが決まっており、家賃を払う目途がついている。
- ・このままアパートに住まわしてほしい。
- ・以前アパートの雨漏りが原因でテレビなどが壊れ、10 万の弁償を大家に依頼したが、その話は放置されている。

*アパートの契約期間は 2 年間で、現在契約から約半年が経っている。

教育臨床カフェは、教職大学院の学生と学部生、実際に教育の現場に関わっている方など、多様な方々と意見交換のできるとても貴重な場です。今年度は特に、院生の方々の力添えのおかげで学内にとどまらず、一般の方々にも教育臨床カフェを知っていただくことができました。今後も幅広く広報活動に取り組み、多種多様な方々の参加を促していきたいと思っています。

今年度は昨年に引き続き、第一回目は発達障害についての学びを深め、二回目はテーマを変えて普段はめったに聞くことのできない、弁護士としての立場からの教育現場や、法教育について学ぶことができました。これからも学生の中の『学びたい』という気持ちに寄り添える教育臨床カフェを目指し、ともに他分野への学びを深めていきたいです。

第Ⅱ部

メンバー活動報告

SOBA での 4 年間

4 年 松下夏子

大学に入って間もない 1 年生の春、先輩の話を聞いて SOBA に入ったことが、ついこのあいだのようです。この 4 年間はあつという間でしたが、SOBA で学んだことは自分に大きな影響を与えてくれました。

児童福祉を勉強したいと思い、この愛知教育大学に入学した自分にとって、SOBA での活動は充実したものでした。授業だけでは子どもについて勉強できる機会は少なかったため、能動的に活動できることが何よりも楽しく感じていました。特にキッズクラブなどのボランティア活動は、消極的でなかなか子どもと関わる機会を作れないでいた自分にとって貴重な経験でした。座学だけではわからないことをたくさん勉強することができました。普段の例会では仲間の意見を聞くことができ、自分だけでは気づかなかつたことを学び、いつもハッさせられる気持ちになりました。教育臨床カフェの活動は、イベントの企画・運営という自分にとって未知の仕事であり、大変苦戦しましたが、勉強になることが多くありました。SOBA の活動の一つ一つが私を成長させてくれました。

2 年生になり、先輩からバトンを渡され、代表をさせていただきました。周りに上手く頼ることができず、独りよがりになってしまふことも多く、メンバーには大変迷惑をかけました。もっとこうしていれば反省する点ばかりでした。しかし、それでもやり遂げることができたのは、SOBA の活動の面白さと、メンバーの支えがあったからです。良い経験をすることができたと思っ

ています。

また、2 年生の夏ごろから、個人的に児童養護施設での学習支援を始めました。SOBA での活動を通して、もっと現場を知りたいと思うようになったことがきっかけです。学習支援の活動では、SOBA での学びを活かせる機会が多くありました。また、現場で知ったことを、SOBA で伝え、意見をもらうこともありました。SOBA の活動が、私の世界を広げてくれたのです。

SOBA での 4 年間の学びは確かに私の中に蓄積されています。これから私は社会に出て福祉の仕事をしていくますが、SOBA で学んだことはきっと役に立ちます。濃く、楽しく、充実した活動をすることでき、SOBA に入ることができて、良かったと心から思っています。これからも後輩の皆さん、SOBA で充実した活動ができるよう応援しています。SOBA のメンバー、川北先生、活動に関わってくださった全ての人々にこの場を借りてお礼申し上げます。4 年間本当にありがとうございました。

1 年間の SOBA の活動を振り返って

3 年 伊藤江里奈

3 年生になり、後期はあまり活動に参加できませんでしたが、特に前期は新しい試みも含めたくさんの活動をすることができたと思っています。

個人としては、念願の東山動物園のボランティアに参加することができました。実際に不登校の子どもと関わるのは初めてだったので、どんな子どもが来るのだろうと期待半分不安半分でしたが、会ってみると普通の子どもで、安心したのを覚えていま

す。不登校児の保護者さんとお話しをさせていただいくと、フリースクール等自分で選んだ学校に通っていたとしても、公立の学校からは不登校という扱いを受ける、ということを聞くことができました。子どもを関わるだけでなく、考えさせられるようなテーマの話題まで出てくる会で、またぜひ参加してみたいと思いました。後輩たちにもぜひ積極的に参加してほしいです。

SOBA の新しい試みとしては、3 年生の学びを後輩に還元しようということで、3 年生が講義を行う日を設けたり、相談援助実習の報告会をしたりしました。私が 3 年生になって強く感じているのは、1, 2 年生だった頃に SOBA で行った事例検討や、学習会で得た知識が、より濃いものとなって学びにつながっているということです。後輩にもそのような体験をしてほしいという思いで、様々なことを報告しました。発表することで自分自身の学びを深めることもできだし、1, 2 年生から質問を受けることで、より深い討論ができたと感じました。

今年度を振り返り、来年度も出来る限り例会に参加し、たくさんの意見を吸収していきたいと思いました。

今年度を振り返って

3 年 別司真希

今年度は、一年生の新しいメンバーが加わり新たな気持ちで活動することができました。「いじめ」についてを主に話し合い、青い鳥という映画をみんなで一緒に見たり、事例を見ながら学校はどうあるべきなのだろうか等について話し合い、学びを深めま

した。臨床カフェは、院生の方々のお力添えが大きく、今までより参加者も多く充実した学びの場になったと思います。

SOBA での活動は 3 年目に入り、話し合いのまとめ役や進行をする機会も増えました。いまだたどたどしくて、フィードバックもうまくできませんが、そういう経験ができるることは今後あらゆる面で生きてくることだと思っています。もともと自分から発言したりすることは苦手で、前にたってまとめ役をするなんて考えられなかっただけれど、SOBA の日々の活動を通して、少人数の中で自分の意見を言うことにはずいぶん慣れました。学びが深められるだけでなく、こういったいろんな面で得られたものは多かったように思います。

活動の後半はなかなか参加ができず、1, 2 年生に任せっきりになってしましましたが、今後もできる限り活動に参加し、みんなで学びを深めて行きたいです。

S O B A での活動を振り返って

3 年 米阪朱里

大学生活、そして S O B A での活動も 3 年目になりました。3 年生は実習で様々なところに行く機会が多かったので、実習での学びを少しでも多く S O B A の後輩メンバーに伝えることが自分の中での目標でした。幸いにも例会で実習の体験を報告する機会をいただき、拙い話でどれだけメンバーの役に立てたか分かりませんが、誰かに自分の体験を語るなかで自分の学びを再確認でき、私にとってとても有意義な時間となりました。

また今年度は、今までの S O B A での活

動の中で学んできたことが実習などでとても生きたことを実感できる1年でありました。SOBAでは子どもをめぐる様々な問題についてメンバーと一緒に学んできました。その中でも発達障害については例会や臨床カフェで多く議論した内容でした。発達障害についての基礎的な知識を学び、メンバーと一緒に発達障害を持っていても子どもが生き辛さを感じないより良い支援はどのようなものかを考えてきた経験が、実習での子どもとの関わり方や見立てに役立ったと思います。私はこれからも子どもと関わる活動を増やしていくと考えているので、SOBAで子どもを取り巻く様々な問題について誰かと一緒に学ぶことができるのはとても意味あることだと思います。

代表の代替えも終了し、SOBAの運営を1, 2年生に頼りきりになってしまっていますが、可能な限り活動に参加し、その経験を自分の学びとして吸収するとともに、SOBAメンバーのより深い学びに貢献できればと思います。来年度の活動も頑張ります。

SOBAの活動を通して

2年 北山桃菜

私は10月からSOBAの代表として活動しています。昨年度はボランティア活動を中心で、例会にあまり参加できなかったので今は手探りの状態です。私はSOBAのメンバーの中で数少ない養護教諭養成課程で、臨床福祉心理コースの人とは考え方や感じ方が違うこともありますが、その違いにより新しい考え方を知る機会となっています。

今年度の例会ではいじめや発達障害について事例を取り上げ話し合いをしました。大学の授業でも学ぶことがあったため、お互いでの知識を生かしつつ、考えることができたように思います。また、今年度も不登校の子どもへのボランティアやキッズクラブなど、子どもたちと関わる機会にたくさん参加することができました。初めは保護者の方にくつづいて人見知りをする子や、一人で走って行ってしまう子など、接しかたが難しい場合もたくさんありますが、根気強く話しかけていると最後には子どもたちから歩み寄っててくれるようになるのがいつもとてもうれしいです。それでもまだまだ戸惑ってしまうことも多く、力不足を実感することも多いです。現在、新たに参加できるボランティアを探しているので、もっともっとこのような機会を作りたいたらなと思います。

来年度も大学院生や先生、先輩後輩、さらには外部の団体の方々などたくさんの人にお世話になりつつ、活動を活性化していきたいと思います。代表としてもさらに勉強を重ね、メンバーにたくさんの知識を発信していく様に頑張ります。

SOBAの活動を経て

1年 青木佑月

今年度の活動で、初めてのことを経験したり、初めての知識を得ることも出来ました。

最初の事例検討会では、大津いじめ自殺事件について話し合いました。事件自体はしていましたが、詳しい内容までは知らなかったので、今回詳しく知ることが出来

てこんなことが実際に起きていたのだと現実を知るよい経験となりました。

不登校児と東山動植物園に遊びに行きました。不登校児と聞いていましたが、実際にあつた子たちはとても元気で、不登校だとは思えないくらいでした。不登校の子は暗いというのも、勝手な先入観であったことが分かりました。人見知りの子もいましたが、一日一緒にいるうちになれてきたのか、午後の、生徒と子供で回るときには、たくさんはなしかけてくれました。終わりには、また会いたいねと言ってしまうほど仲良くなれました。楽しかったです。

キッズクラブにはいくことはできませんでしたが、本を探したり、実際に作ってみたり、前準備を手伝いました。

先輩から実習の話を詳しくじっくり聞けたり、興味のある本を読めたり、充実した活動が出来ました。

SOBA での活動を振り返って

1年 佐藤友紀

SOBA を通して様々な活動に参加することができ、充実した 1 年になりました。

事例検討会では、いじめや ADHD の事例について知り、学校や社会はどのような対応をしていいかについて考えることは難しいと感じましたが、様々な意見を聞くことによって考えを深めることができました。

東山動物園での不登校児との交流では、自分の持っていたイメージとは異なり、子どもたちはとても明るく積極的で、実際に交流しなければ分からぬことはたくさんあるのだと知りました。子どもたちと交流

する際、どんな風に話しかけたらよいかが分からず、戸惑ってしまうことがあり、コミュニケーションをとることの大切さも学びました。

まだ知識がなく、1 年を通して先輩方や先生のお話を聞いているだけという時も多かったです、それらのお話はとても参考になり、もっと自分でも勉強していくかなければならぬと感じました。

今後も SOBA の活動に積極的に参加し、自分の視野を広げていきたいと思います。

SOBA の活動を振り返って

1年 畠山美樹

この一年を通して SOBA で活動してみて、とても自分のためになったと思います。まず、事例検討会では様々な実際に起こった出来事に触れる事ができました。内容はいじめや発達障害についてなどで、もし自分がその立場にいたらどのように接すればよいのか、どのように解決に向けて動けばよいのかを真剣に考えることができました。特にいじめに関しての事例検討では、想像していたよりも悲惨な内容が多く、とても驚きました。やはり実際の出来事に触れ、他人ごとではなく、自分のことのように考えることはとても大事なことだと感じました。また、私はキッズクラブに参加しました。なかなか子どもとふれあう機会がないので、とても新鮮でした。参加してくれる子どもたちがどのような物で楽しんでくれるかを考えながら、皆で準備することも楽しかったです。当日も参加してくれた子が興味をもって真剣に取り組んでくれている姿を見て、とても嬉しかったです。来年度も積極的

に SOBA の活動に参加し、自分の力にしていきたいです。

SOBA の活動を通して
1年 渡辺好香

私はもともと、いじめや不登校について興味があったので、SOBA の案内を初めてみた時から、やりたい！と思いました。そこからさまざまな活動を通して、多くのことを学ぶことができました。

事例検討をはじめ、不登校の子どもたちと関わるボランティアやキッズクラブに参加したり、外部の方のお話を聞いたり、先輩方の実習のお話を聞いたりなど、内容は盛りだくさんでした。

事例検討はあまり参加できませんでしたが、他のメンバーの意見や考えを聞くたびに、私が気づかなかつた多様な視点を発見でき、「こんな考え方があるんだ」と刺激を受けていました。1年生が行う学習発表会で、私は不登校について取り上げましたが、調べていく中で、不登校の定義や実態、支援団体などこれまで知らなかつたことをたくさん知ることができました。ボランティア活動も、私にとっては初めての体

験でした。多くのものを得ただけでなく、人と関わることが好きだということを再発見できた良い経験になったと思います。また、学習支援団体の方々にお越し頂いたときは、主な活動内容や体験などを聞きました。名古屋市にたくさんの支援団体があることに驚いたと同時に、そのような学習支援についての関心を深めることができました。臨床福祉心理コースの3年生の先輩方は、実習中に見たこと、体験したこと、感じたことなどをそのまま話してくださいました。2年後のことイメージしやすく、とてもためになりました。3年生になったときの実習がどんな感じなのか想像できなかつたので、貴重なお話を聞いて嬉しかったです。

どの活動も、SOBA に入っているなければできなかつたのではないかと思います。多くのことを学び、吸収することができた1年でした。来年度以降は、より多くの人に関心を持ってもらえるように頑張りたいです。また私自身も、もっと積極的に SOBA の活動に参加していきたいと思います。

第Ⅲ部

資料

【東山動物園】



【キッズクラブ】





学習発表会 プрезентーション資料

ダウントークン

• 正式名称はダウントークン症候群。
ヒトのからだには体細胞が22個あるが、その21番目の体細胞に
通常二本しかない染色体が三本存在する。
染色体異常の障害なので、ダウントークン症特有の特徴が見られる。
最近では医学の進化に伴い、平均寿命が50歳前後になる。

知的発達に見られる特徴

- 平均50前後
- 80%
- 短期記憶は苦手
- 長期記憶が得意

運動面に見られる特徴

- 平衡感覚が弱い
- 虚弱体質
- 体重支持機能の遅れ

性格上の特徴

- 社交的で明るい
- 頑固
 - 一度身に着けた順序はきっちりと守る

最後に…

参考文献

- 新生児のダウントークンについて—その特徴や症状を知つておこう(mamari.jp)
- ダウントークンの顔や手に現れる身体的特徴 | ダウントークンのいのち生活(choppi.jp)
- ダウントークンには特徴が？(wella.jp)
- 指導の基礎的知識(www.wellcared.jp)
- 新愛護って何? (hideyukiriba.com)
- [人工開拓用語集]通称篇-人工開拓ライフ(kanetsuu-life.com)

不登校

現代学習課程
相談支援心理コース
看板教材

不登校児童生徒とは

「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席したもののうち、病気や経済的な理由によるもの除去したもの。」

(文部科学省、「不登校児童生徒への支援に関する指針」より)

不登校となつたきっかけと考えられる状況

(不登校児童生徒への支援に関する指針(文部科学省平成26年度実施計画)より)



2. 中学校

1年生→・環境の変化
・人間関係の複雑化
・定期テストが始まる

2年生→・息切れが起こる
・成果が出ないことへの無力感

3年生→・将来に対する漠然とした不安
・受験勉強のストレス
・中学を卒業することへの不安

不登校になる環境

1. 小学校

- 低学年→・親と離れて過ごす時間が長くなる
・ルールや集団行動が多くなる
・勉強が本格的に始まる
- 中学年→・運動能力の向上や、学習能力の個人差が明らかになっていく
・恥ずかしいという気持ちが芽生える
・魅徳についていけなくなる
- 高学年→・思春期に入る
・友人関係、集団関係の重要性が増す
・親や教師を容疑視するようになる
・学習内容が難しくなる

2. 中学校

- 1年生→・環境の変化
・非義務教育化
・学習内容の高度化

- 2年生→・思い描いていた理想と現実のギャップ
・将来への不安

- 3年生→・将来への不安
・受験へのプレッシャー

3. 高等学校

不登校への対応

- ・罪悪感を軽くしてあげる
- ・好きなこと、得意なこと、興味のあることを応援し、自己肯定感を育む
- ・教諭、保護者、相談室、保健室が連携して対応する。
- ・オンラインでのカウンセリング
- ・不登校専門の家庭教師、塾
- ・ピアサポート（不登校経験者によるメンタルケア）

児童相談所

- ・18歳未満が対象
- ・公的機関でほかの機関とのつながりがある

保健所

- ・年齢対象が決まっていない
- ・健康面に問題がある場合の対処

教育相談所

- ・カウンセリングを行う
- ・学校と当事者の間に存在

支援機関

- ・適応指導教室
- ・サポート校
- ・フリースクール
- ・児童相談所
- ・保健所
- ・教育相談所
- など

適応指導教室

- ・自治体により運営
- ・学校の出席日数としてカウントされる

サポート校

- ・教育開発企業が母体
- ・通信制高校に通う生徒の卒業資格取得をサポート

フリースクール

- ・民間の教育施設
- ・学校によってはフリースクールに通った日を所属学校の出席日数にカウントされる。

まとめと感想

不登校といっても、当事者の年齢や環境によって原因はさまざまであり、支援の方法もたくさんあることを知り、その子に会った支援をしていくことが大切だと分かった。自己肯定感や自信をつけることで、不登校が改善していくことがわかり、自己肯定感や自信を持って日々の生活を送れるように配慮すれば、不登校は未然に防げるものかもしさないと感じた。

引用資料

- 文部科学省「不登校児生徒への支援に関する取扱い」
http://www.mext.go.jp/component/lite_nenkyo/monogatari/_softbank/pdf/eisai/2016/08/01/134936_1.pdf (2016/10/28閲覧)

参考資料

- 岩井信明、木原友巳編著『不登校・ひきこもりと認知症』三才書房、2006年
- 理津第二編著『スクールカウンセラー活動の考え方・進め方 勉強と心理援助の基礎知識を読み直す』金子出版社、2014年
- ゆーくらっく「小学生の不登校の原因と対応・早期発見に向けた」
<https://yukurakkublog.hatenablog.com/> 2016/10/27閲覧
- ゆーくらっく「中学生の不登校の原因と対応・早期発見に向けた」
<https://yukurakkublog.hatenablog.com/> 2016/10/27閲覧
- ゆーくらっく「高校生の不登校の原因と対応・早期解決に向けて」
<https://yukurakkublog.hatenablog.com/> 2016/10/27閲覧

連携シミュレーション「不登校Q&A」

- http://www.edvise.mre.go.jp/2016/08/01/134936_2.pdf (2016/10/28閲覧)
- 不登校ナビ「不登校相談者とフリースクールの問い合わせ窓口」
<http://nichikinavi-support.com/pf/reason2/> 2016/10/27閲覧
- 不登校ナビ「出張相談外来と保健所で行なう不登校支援の内訳」
http://nichikinavi-support.com/child_consultation_center_and_health_center/ 2016/10/27閲覧
- 木原様ナビ「不登校相談担当とはどんな活動内容と目的、担当があるところ」
http://nichikinavi-support.com/child_consultation_center_and_health_center/ 2016/10/27閲覧
- いじめ防止条例として「教育相談室の立ち位置」
http://www.edvise.mre.go.jp/2016/08/01/134936_3.pdf (2016/10/28閲覧)

愛着障害

畠山 美樹

愛着障害とは

- 愛着に深刻なダメージを受け、愛着をまったく求めようとしなくなったり、逆に見境なく愛着したりするようになる状態。
- 愛着とは、特定の人に対する特別な結びつき。安心感を生み出すもの。
- 「愛着行動」はストレスや不安が高まったときに活発になる自分を守るために重要な行動

→愛着障害の場合、安心感を得にくくなる。

愛着障害の主な症状

- 人とほどよい距離がとれない
- 離つきやすい、ネガティブ
- ストレスに強く、うつや心身症になりやすい
- 過去にとらわれやすい

愛着障害の主な要因

- 親の不在
 - 幼少期の他の乳児の経験。
- 養育者の交替
 - 既設に受けられる。養子になる。
- 親の愛着スタイルの伝達
 - その子どもに向かって養育者の影響を受ける。
- 親からの否定的な扱い・評価
 - 親から認めてもらえない。虐待を受ける。

愛着障害の分類(幼少期)
愛着パターン～エインズワースの研究～

The diagram illustrates the four attachment patterns based on the Eysenck study:

- Secure型 (Blue):** 行動に異性がない (No sex difference in behavior).
- Ambivalent型 (Green):** 離れづらい (Clings to people).
- Avoidant型 (Orange):** 愛着行動を避けたり拒んだり (Avoids attachment behavior).
- Disorganized型 (Red):** 愛着行動を複雑に示す (Shows mixed attachment behavior).

愛着障害の分類

愛着スタイル(大人)

安全型	過渡型	不安型
<ul style="list-style-type: none"> 対人関係が安定している 仕事や対人関係のバランスが良い ストレスを緩め込みにくい 	<ul style="list-style-type: none"> 距離をあいた対人関係 自己表現が苦手 築いた印象を毀する 	<ul style="list-style-type: none"> 人に気を遣ってばかり 相手への過剰な執念 他序しあわしい

愛着障害だった著名人

夏目漱石

- 八人兄弟の末っ子。事情で里子に出される。
- 押し付けがましい愛情をもらう
 - 親には信頼も尊敬もせず、ひねくれていた
- しかし、両父母の喧嘩でまた実家に戻る
 - 養育者をたらいまわしにされ、何度も見捨てられ感を味わった
 - 『猫ちゃん』には、誰にも認められない寂しさを突き郢のことで照らしていた幼少時代を反映させている

太宰治

- 生まれてすぐ乳母に預けられる
- 乳母と信頼関係を築く
- しかし、突然遠い他国へ乳母が嫁ぎ、置いて行かれる
- 見捨てられ、深い绝望を味わう
- 苦しみから逃れるために再婚した乳母に対してよそよそしくなる

→回避型の愛着になってしまった

愛着障害を防ぐために

- 幼少期から適切な愛情を注ぐ
- 養育者を一定にする
- 施設に預けられた子どもたちの担当職員を一定にする。統廃合をためらうなしにしない
- 子どもに肯定的な評価をするように心がける

まとめ・考え

- 愛着障害は子どもに限らず、大人まで引きずってしまうもの。
- 信頼関係の欠如が影響。複数のパターンがある
- 愛着スタイルによって人間関係の作り方が違うので、自分も周囲の人も知って、向き合っていく必要があると考えた。
- 愛着障害を持つ人たちのストレス・不安のはけ口になれるような人・場所も作ることが必要だと思った。



参考資料

- 同社機関「要筋障害 子ども時代を引きずる人々」(丸文社) 2011年
- nophis news 「精神疾患のトライマ：アラッテメント（要筋）障害とトライマへの影響」(閲覧日：2014年10月20日)
- カルマ研究会「要筋障害の原因と治療」(閲覧日：2014年10月20日)

教室の中の多様性——安心して過ごせる環境をつくるために

川北稔（教職実践講座）

「LGBT」や「性的マイノリティ」という言葉を聞くことが増えてきた。文部科学省は、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」という通知を出し、初めて性的マイノリティの子どもへの配慮を求めた（平成27年4月）。また『性同一性障害や性的指向・性自認に係る、児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け）』という資料も公表している（平成28年4月）。

「性同一性障害」は、生物学的な性と性別に関する自己意識（性自認）が一致せず、社会生活に支障がある状態を指す（前掲資料）。性的指向（恋愛対象が誰であるかを示す概念）に関する少数派も含め、「性的マイノリティ」の子どもへのきめ細かな対応が求められる。

2017年1月、愛知県日進市のNPO法人「椿・ソーシャルアイデンティティサポート」が実施した「LGBT理解普及講座」に参加した。同法人では日進市の市民提案型事業の一環で、トランスジェンダーへの理解を呼びかけるリーフレットを作成し、市内の小中学生に学校を通じて配布した。今回の講座では、愛知教育大学のセクシュアルマイノリティ支援団体「BALLoon」の久保勝さん（3年生）が、LGBTについての基本理解や学校で求められる配慮についてお話をされ、その前に私は教室のなかの多様な生きづらさについて解説した。今回掲載するのは、その部分の資料である。

次ページのスライドNo.2は、教室のなかに支援や配慮を要する子どもが増えてきたことを示す。No.5は特別な支援ニーズを持つ子どもの数を示したもので、「家庭養育問題」「発達障害」など、下から順に該当する子どもが少なくなり、問題として深刻になっていく（上の2つ以外は、それ自体が「問題」というわけではなく、背景となる生きづらさを示す）。

この図には含まれていないが、日本語の指導を要する外国籍の子ども、うつ状態の子ども、さらに今回のテーマであるLGBTの子どもなど、多様な困りごとや支援ニーズを持つ子どもなども加えることができる。現代は「完全に普通」の人はむしろ珍しく、誰もが何らかの意味でのマイノリティ（少数派）に当てはまる時代といってよいかもしれない。また、思春期を中心にしてすべての子どもが自分の生き方を探すなかで支援や指導を必要としている。

しかし、LGBTも貧困も発達障害のある子どもの存在も、見ようとななければ見えないままになってしまいがちである。それらはどこか縁遠い世界のことだと考えてしまう大人の前では、子どもがありのままに自分を出したり悩みを話したりすることも難しい。学校の教員や子どもの支援を目指す人は、一つしかない生き方を知らず知らずのうちに押し付けることがないようにしたい。自分自身が「普通」に当てはまるのではなく、様々な個性の組み合わせでできた存在だということを確認してみることも、良いきっかけになるだろう。

「BALLoon」は球体を意味し、「誰も隅に追いやられない教育」を意図して名付けられたという。マイノリティについて考えることは特別なことではなく、誰にとっても生きやすい学校や社会を目指すことにつながっているのである。

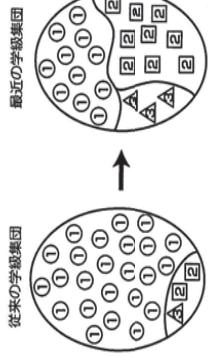
LGBT理解普及及講座②

LGBTの子どもたちに学校ができる環境を～安心して過ごせる環境をすべての子どもに～

川北稔（愛知教育大学）
kawakita@auecc.aichi-edu.ac.jp

1. 学校生活のなかの生きづらさ

- ・子どものニーズの多様化



①…1次支援レベル
②…2次支援レベル
△…3次支援レベル

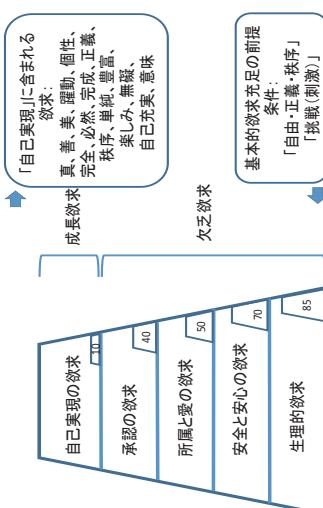
従来の学級集団と違い、最近は「1次支援レベル」（一斉授業にそのままついてこられる）の子が減ったといわれる。

その分、「2次支援レベル」（集団の中で配慮が必要）、「3次支援レベル」（集団の外でも専門的に支援する場が必要）の子が増えたと言われている。（河村茂雄『日本の学級集団と学級経営』図書文化社、2010年）

2

1. 学校生活のなかの生きづらさ

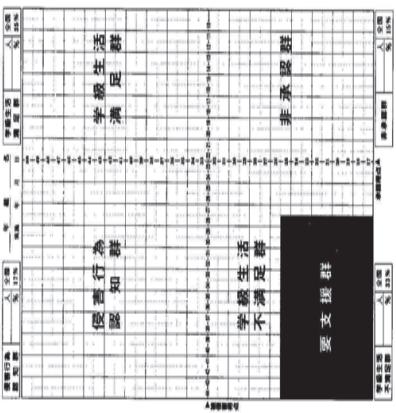
- ・マズローのピラミッドから考える：あなたのニーズ、満たされていますか？



(廣瀬津人・菱沼典子「マズローの基本的欲求の階層圖への原典からの新解釈」「聖路加看護大学紀要」35、2009年から作成)

1. 学校生活のなかの生きづらさ

- ・学級満足度をはかる
アンケートQ-U
(図書文化社)



1

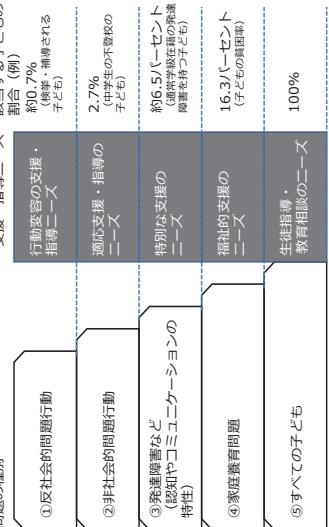
1. 学校生活のなかの生きづらさ

- ・学級満足度をはかる
アンケートQ-U
(図書文化社)

4

2. 困り感から問題行動へ

- 問題行動へ至るピラミッド。上の2段以外は「問題」ではないが背景になりうる。



(加藤哲文・大石幸二『学校支援に活かす行動コンサルテーション実践ハンドブック』特別支援教育を踏まえた生徒指導・教育相談への展開』学苑社、2011年を参考に作成)

5

2. 困り感から問題行動へ

⑤すべての子ども

- どんな子どもも、成長するにつれて今までと違う欲求が出てきて戸惑つたり、間違った満たし方をしてしまったりする。困りごとは成長の兆し、チャンスでもある。

- 生徒指導、教育相談はすべての子どもが対象。
「普段は校庭で子どもたちと走り回っている私が、朝礼台のところでぼおーっと座つていると、いつもとは違うメンバーがまわりに寄つてきたことがありました」「教師側が、あるチャンネルで子どももつながろうとする必要ですが、ユートラルしていることで、つながることのできる相手が増える大切さを感じました」(小林ほか編 2008)。

6

2. 困り感から問題行動へ

⑤すべての子ども

- 所属と承認欲求のゆがみ：「あの子は「高い」子で、あの子は「低い」子。あの子は「上」であの子は「下」。あるいは、「イケてない」なんて言葉でもかもしれません。学校生活を過ごす中で、人間関係の「地位の差」のようなものを感じたことはなかつたでしょうか。なぜ、ギャルグループは、あんなにも幅をきかせているのか。なぜ、モテる子はモテない子を馬鹿にしたり、見下したりしてもいいような空気になっているのか。」(鈴木翔「教室内(スクール)カースト」幻冬舎新書、2012年)

7

2. 困り感から問題行動へ

⑤すべての子ども

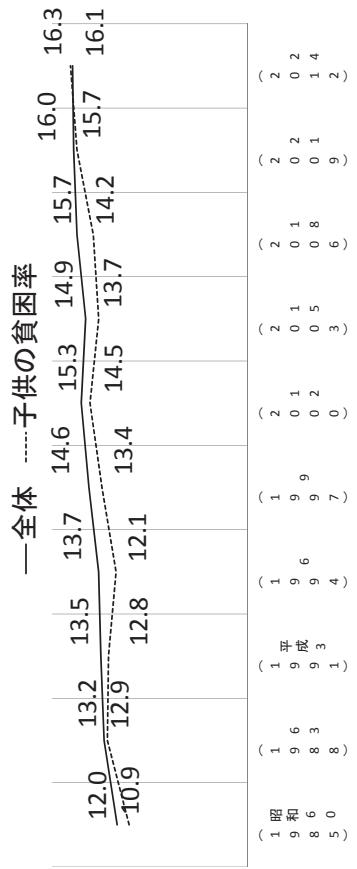
- 所属と承認欲求のゆがみ：「あの子は「高い」子で、あの子は「低い」子。あの子は「上」であの子は「下」。あるいは、「イケてない」なんて言葉でもかもしれません。学校生活を過ごす中で、人間関係の「地位の差」のようなものを感じたことはなかつたでしょうか。なぜ、ギャルグループは、あんなにも幅をきかせているのか。なぜ、モテる子はモテない子を馬鹿にしたり、見下したりしてもいいような空気になっているのか。」(鈴木翔「教室内(スクール)カースト」幻冬舎新書、2012年)

8

2. 困り感から問題行動へ

④家庭養育問題を抱える子ども

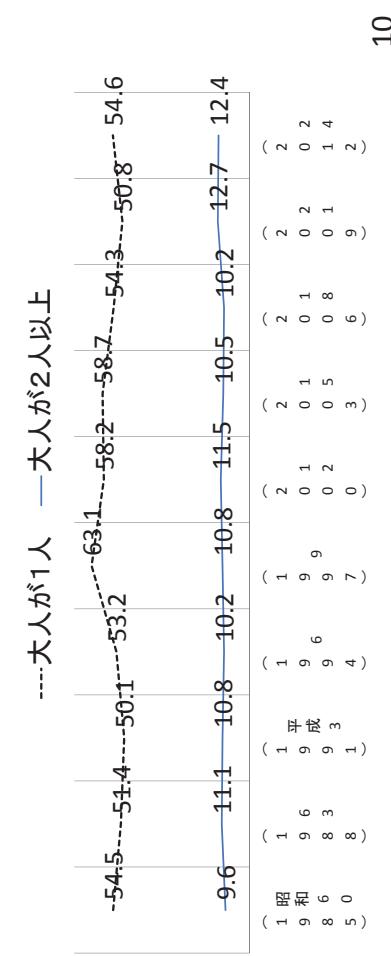
- 子どもの貧困率は約16%（6人に1人）。ひとり親世帯では約半数が貧困状態。（『子供・若者白書』平成27年版）



2. 困り感から問題行動へ

④家庭養育問題を抱える子ども

- ひとり親世帯になると、貧困率は50%を超える。



2. 困り感から問題行動へ

④家庭養育問題を抱える子ども

- 子どもの貧困に気付くために。「冬なのに夏の制服で来る。修学旅行や遠足に、一度も参加しない。給食を食べながら「きょうう初めてのご飯」と話す。「気づけるポイントはいくらでもある。何かいいことあつた？嫌なことあつた？これだけでも入り口になる」
- 「家庭のことに入っついのかどうかうちゅうとする教員もいる。「職人技は必要ない。どんな思いで生徒が生きているのか、生身の人間である目の前の生徒の背景を見ることを始めほしい」（朝日新聞取材班『子どもと貧困』朝日新聞出版、2016年）

2. 困り感から問題行動へ

③発達障害を抱える子ども

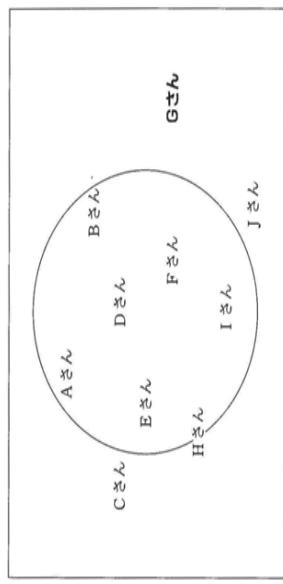
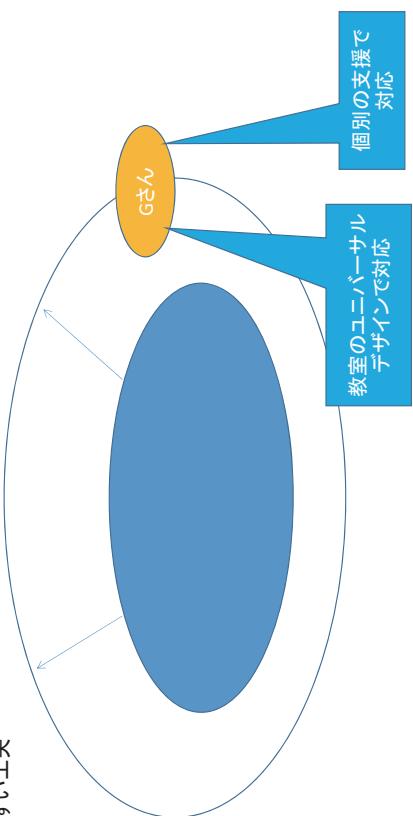


図1 改善前

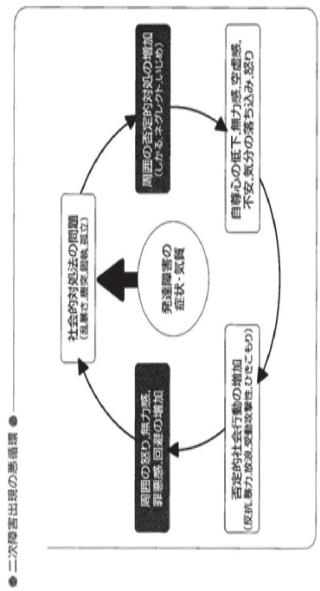
ユニバーサルデザインの考え方

どの子も参加しやすい工夫



13

2. 困り感から問題行動へ ③発達障害を抱える子ども



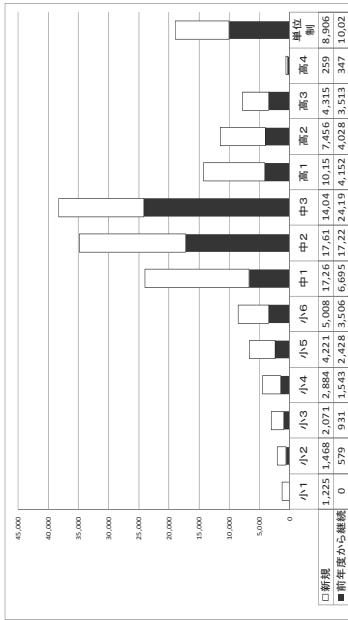
(齊藤万比古編『発達障害が引き起こす二次障害へのケアとサポート』学研、2009年)

14

2. 困り感から問題行動へ ②非社会的問題行動とは

- 「何をしても楽しくない」「生きていっても仕方ががない」などうつ症状に関する18項目の質問で、小学生で7.8%、中学生で22.8%の割合で「抑うつ群」という結果が出た。
- うつ病は小学生で1.6%、中学生で4.6%と推定。成人の場合の有病率は約5%。(専田健三『子どもたちのうつ 心の叫び』講談社、2004年)

40



15

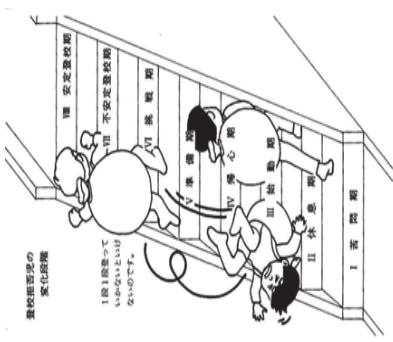
(文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」平成26年度から作成)

16

2. 困り感から問題行動へ ②非社会的問題行動とは

- 不登校状態の女の子(中学2年の言葉)
 - 私は、学校という一本のロープの先を握っている。もう一方の先を握っているのは(顔は見えないけど)私の先生。もし先生が「あなたに会いたい」と言つて、ロープをぐいぐいと引っ張つたら、私は怖くなつてロープを放してしまうと思う。だからそれはやめてほしいで、私の「会いたくない」という言葉を鵜呑みにして、先生の方からロープを放してしまったら、私の手にはロープの先しか残らない。だからんど垂れ下がったロープの先には、もう先生はない。それも悲しい....
- (伊藤美奈子『不登校——その心もようと支援の実際』金子書房、2009年)。

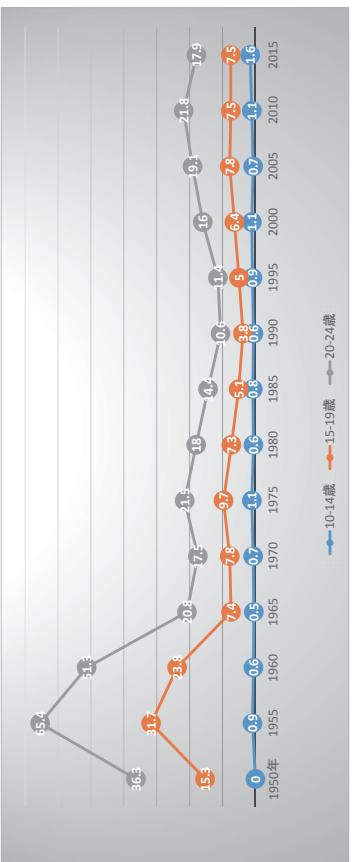
17



18

2. 困り感から問題行動へ ②非社会的問題行動とは

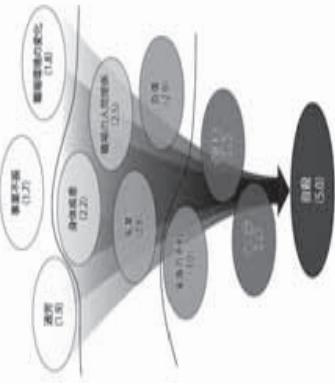
- 自殺の現状(人口10万人あたり自殺件数の推移)



19

2. 困り感から問題行動へ ②非社会的問題行動とは

- 成人の自殺の背景(NPO法人ライリンクによる調査)

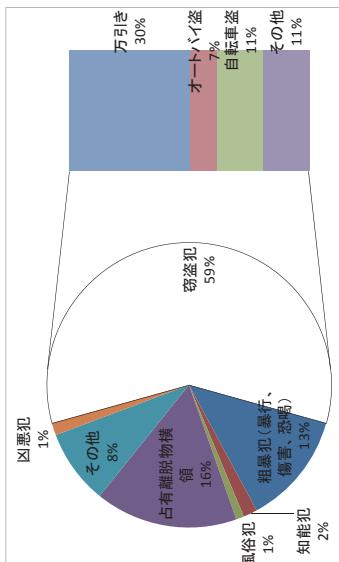


20

2. 困り感から問題行動へ

①反社会的問題行動とは

- 少年が検挙される主要な犯罪の種類



(警察庁生活安全局少年課「平成25年における少年の補導及び保護の概況」)

21

3. 生きづらい子を支援するためにあつてよい「違い」、いけない「違い」

- (1)子どもによって「人気がある、ない」があるのは仕方ががない。A君と一緒に給食を食べる人は誰もいない。
- (2)Bさんの家では家族同士、日本語で会話をしている。Cさんの家では中国語を使っている。
- (3)Dさんの家では経済的余裕がないので、D子さんは修学旅行に参加しないことにした。
- (4)Eさんは高校で、障害特性に応じた支援を受けており、大学入試センター試験で1.3倍に伸ばしてもらう申請をした。

「ちがいのちがいを追究しよう」「新編 新しい社会 公民」(中学校社会科用教科書 東京書籍)を参考
に作成

22

3. 生きづらい子を支援するために「自分」と「相手」を大切に。

- (1)同じクラスで生活している同士なので、A君も給食を一緒に食べよう誘う。
- (2)学校の情報が同じように伝わるように、Cさんの家には中国語の翻訳付きのお便りを配布した。
- (3)Dさんも修学旅行に参加できるように行政から援助を受けた。
- (4)Eさんだけに特別なことはできないので、学校生活で補助プリント、座席の位置の工夫などをすることはない。

「ちがいのちがいを追究しよう」「新編 新しい社会 公民」(中学校社会科用教科書 東京書籍)を参考
に作成

42

相手肯定	相手否定
自分肯定	自分もみんなのこども好き
自分否定	みんなは立派だけど自分は・・・

23

24

おわりに

川北稔（教職実践講座）

中央教育審議会の答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」（平成28年12月21日）では、学校における生徒指導や特別支援教育等を充実していくために、学校や教員が心理や福祉等の専門スタッフ等と連携・分担する体制を整備し、学校の機能を強化していくことが重要だと述べている。

愛知教育大学でも教育支援専門職養成課程が新年度から（2017年4月）設置される。心理の専門家である「スクールカウンセラー」、福祉の専門家の「スクールソーシャルワーカー」、行政面から学校現場に携わる事務職員を、教員とともに「チーム学校」を担うプロフェッショナルとして養成することが目標に掲げられている。従来、本学には教員養成課程と並んで現代学芸課程が設置され、そのなかの臨床福祉心理コースの学生はSOBAの参加者も多かった。新年度からは、より明確に「学校や教員とともに子どもを支える」ことを目標にしたメンバーが参加してくることが期待できる。

私自身は、教員を養成する教職大学院に所属しているが、新年度からはこの教育支援専門職養成課程の授業の一部を担当することになった。

同じ大学で、教員として、または専門職として学校を支える学生を育てることの意味は大きいと思われる。私自身の希望も含めた観測だが、新年度からは異なる課程の学生同士が交流し、お互いに子どもにかかわる仕事を目指している者としての共通点や役割分担について学ぶ機会も増えるのではないか。これまでにも、学校の教員が心理や福祉の専門職と連携する必要性が唱えられているが、教員には心理や福祉について学ぶ機会が必ずしも確保されておらず、どこに行けばそれらの専門職に会えるのか、また専門職が何をしてくれる存在なのかが分かりづらい現状があると思われる。

それに対して大学在学中から教育と心理、福祉など相互の専門性を学び、実際に学ぶ学生同士の交流があれば、チーム学校の実現も近づくのではないか。

新年度のSOBAが、地域の子どもや教育団体との関わりも含めて、教員の仕事や心理、福祉の仕事を多角的に学び、交流する場所となることを期待したい。

SOBA 活動報告書 第 14 号

編集・発行 愛知教育大学教育学部附属教育臨床総合センター
〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1 番地

SOBA 連絡先

FAX 0566-26-2713

E メールアドレス empower@m.auecc.aichi-edu.ac.jp

ブログ「soba の活動」 <http://d.hatena.ne.jp/soba2525/>

発行責任者 愛知教育大学 教職実践講座 川北 稔
SOBA 代表 北山 桃菜

表紙絵 海野 由希子
伊藤 梨香

発行 2017 年 3 月